

## 仏塔作製の儀軌とその真言について

研究生 名取 玄喜

釈尊によって説かれた教えを舍利とみなし尊重する法舍利信仰は、グプタ期以降の密教の興隆と相俟って一部の陀羅尼をも舍利とみなすようになった。この舍利の概念の拡大は陀羅尼の書写による舍利の創出を可能ならしめ、舍利を納める仏塔の造立も、伽藍単位で行われる大規模な事業から個人がみずからなし得る小規模な事業へと変容していった。インド各地の遺跡から出土している仏塔印章などは、個別的な仏塔の作製が仏教徒にとって一般化していたことを裏付けるものといえる(島田明「仏塔から仏像へ」『大乘仏教の実践・シリーズ大乘仏教3』pp.133-151)。

こうした小型の仏塔を作製する際の具体的な次第を記した文献は複数残されており、いずれも泥をこねて型にはめこみ小型の仏塔を作製する方法と、その所作ごとに用いられる真言が説かれている。しかし、その内容は文献間で少なからず相違があり、かならずしも一律の方法で作製されていたわけではないことが窺われる。

そこで、各文献の仏塔作製儀軌の特徴を確認する手始めとして、発表におおしては *Anupamavajra* 著 *Ādhikarma-pratīpa* (ĀP) を取り上げて、そこに説かれる真言などを他の仏塔作製儀軌を説く文献のものと比較した。比較対象には ① *Advayavajra* 著 *Kuddrīṣṇurghāna* (KN) 、② *Sarvagvajñāntapāramitāsiddhicaitya-dhāvanī* (SPS) 、

Toh. 601) 、③ 『造塔延命功德經』(『造塔』、大正藏 No. 1026) 、④ 『一切如来大秘密王未曾有最上微妙大曼拏羅經』(『大曼荼羅』、大正藏 No. 889) を取り上げた。

これらを比較し明らかになった点をいくつか挙げると、ĀP で泥塔の型に胡麻油を塗る際に唱えられる *om arajie virajie svāhā* という真言は、KN・SPS にも同じ役割の真言として説かれているが、『造塔』では火色観と呼ばれる観法をなしてから赤土を塗り、含字を観想する際の真言とされ、『大曼荼羅』では両手の中に阿字を観想してから泥をこねて団子を作る際の真言とされている。また、ĀP および KN・SPS・『延命』では *om dharmadhātugarbhe svāhā* という真言によって書写した縁起法頌を泥塔に納入する次第が説かれる。これは作製した泥塔に舍利としての縁起法頌を納入することで泥塔を聖化する方法といえるが、『大曼荼羅』のみ、両手の中に阿字、月輪、日輪、唵字、毘盧遮那如来を順次観想してからの真言を唱えるという特有の次第が説かれている。また、ĀP・KN・『大曼荼羅』では次第の最後に *om akāśadhātugarbhe svāhā* という懺悔の真言が説かれる。これは ĀP・KN では何に對する懺悔なのか判然としないが、『大曼荼羅』では、泥中の昆虫などを傷つけたり、儀軌の通りに泥塔を造らなかつた場合は罪を招くことになるので、そのために唱えるものであると理由が説かれている。

今回取り上げた文献以外にも仏塔作製方法を説く儀軌は複数残されているので、それらの精査を今後の課題とする。